富と時間の物語としての“The Rich Boy”

——持つ者 Anson への共感を込めて——

池田　幸恵

序

1925年に雑誌 *Red Book* に掲載された F. Scott Fitzgerald による短編“The Rich Boy”は，名前の明かされない語り手が，大学時代に知り合った友人である，この物語の主人公 Anson Hunter について語っていくという形式を成している。この作品の Part I は，その語り手自らがどのように語っていくかという，語る行為そのこと自体への言及をしているプロローグとなっている。そしてこのプロローグには，この箇所を引用することなく本作品を論じている研究はほぼ存在しないのではないかと言える程に，非常に有名で，注目を惹き，そしてこの作品の解釈を決定づけてきたと言える重要な一節を含んでいる。

> Let me tell you about the very rich. They are different from you and me. They possess and enjoy early, and it does something to them, makes them soft where we are hard, and cynical where we are trustful, in a way that, unless you were born rich, it is very difficult to understand. [...] They are different. (318)

この一節に注目したのは批評家たちだけではなく，Ernest Hemingway もこの一節に触発され，短編小説“The Snows of Kilimanjaro”(1936) の中で，“He [Harry] remembered poor Julian and his romantic awe of them [the rich] and how he had started a story once that began, 'The very rich are different from you and me.' And how some one had said to Julian, yes, they have more money,” (23) というように Fitzgerald を poor Julian と名付け，揶揄して引用している。つまり Hemingway がこの一節をとりわけ引用したことから判るように，彼は Fitzgerald の関心やこの作品のテーマが富にあると考えていたことがわかる。このように，本作品は Hemingway が考えたのと同じように，富の問題，ひいてはその富を所有する金持ちをテーマとした作品であるとしてこれまで読まれてきた。

また，本作品が富の問題をテーマとしているという解釈は，作品の外部の事情によっても強められている。まず，Fitzgerald は生涯の作家活動を通して，例え

ば Kirk Curnutt が，"money is an essential motif for Fitzgerald" (63) と述べるように，富にまつわる問題に関心を示し続けた作家であるということ。さらには Matthew J. Bruccoli が，" 'The Rich Boy' is an extension of *The Great Gatsby*, enlarging the examination of the effects of wealth on character." (228) と言っているように，"The Rich Boy" は *The Great Gatsby* が扱った富の問題を引き継いでいると考えられてきたからである。

以上のように，確かに本作品が富についてを主題としているのは，間違いのないことだと思われる。しかしながら，富についてだけがテーマだと考えるのは早計すぎる。なぜなら，本作品のタイトル "The Rich Boy" が明示するように，この作品には "Rich" という富の問題と同時に，"Boy" という問題があり，この二つの事柄が，絡まりあってテーマを成していると考えられるからである。

この〈boy〉という言葉の使用には，その使用が奇妙に思われるような，作為的なものがある。この作品では，語り手が大学を卒業したばかりの Anson と出会った時からの，21歳から30歳までの Anson のことが中心に語られる。しかしその彼を〈boy〉と表現するのは奇妙に思われるのだ。*The Oxford English Dictionary* によると，この〈boy〉という語は，"A male child below the age of puberty. But commonly applied to all lads still at school" と説明されている。もちろん実際には，辞書の定義がどうであれ〈boy〉という語の指す年齢を厳密に限定することはできない。それでもやはり，大学を卒業し，社会に足場を置く21歳から30歳の人間を〈boy〉と言ってしまうには不自然さがある。そのことから，〈boy〉という語の使用は何気ない選択ではなく，作為的な使用だと考えられる。そして，作為的に使用されているがゆえに〈rich〉と同じく，〈boy〉という問題も本作品においてテーマとしての重要さが与えられているに違いない。この〈boy〉という問題とは，通常ならば〈man〉と表現される年齢であるところを〈boy〉と表現されていることから考えて，子どもから大人へという成長とそれに対応した年齢との間のズレの問題だと考えられる。それはひいては Anson の年齢つまり時間との関わり方，時間認識の問題である。そこで，本論文では〈rich〉という富の問題と，〈boy〉という時間の問題を併せて考察していくことが，"The Rich Boy" という作品を理解するためには必要であると考え，Anson の時間との関わり方，そして，その事と富がどのように関係しているかを論じていくことによって，Fitzgerald が Anson を通して描こうとしことを明らかにしたい。

I.

1. Anson の時間認識

本作品は主人公 Anson の30歳までの人生を描いているが，その中でもとりわ

け3つの出来事に焦点をあてて描いている。それは，Paula Legendre との恋愛と結婚問題，同じく Dolly Karger との結婚問題の絡んだ恋愛，そして叔母 Edna の若い男との婚姻外の恋愛についてである。つまり，この3つの出来事はみな恋愛と結婚という共通した事柄であり，そのことから，この作品において恋愛と結婚は重要な役割を持っていると言える。そして，そのことを成長の問題と関連させて考えると，恋愛は〈boy〉のままでもすることができるが，結婚は〈boy〉から夫や父親という役目を果たす大人になることが求められる。結婚は Anson にとって〈boy〉から大人への通過儀礼としての役割を担っていると言える。それゆえに，恋愛は〈boy〉つまり子どものままでいることを表し，結婚は大人を表す指標となっていると言える。そこで，上述のこれら3つの恋愛と結婚に関わる出来事を見ていくことで，Anson が子どもから大人への成長の問題とどのように関わり合っているかという点から，Anson の時間認識を明らかにすることができるだろう。

Anson は多くの女の子と遊びの恋愛をすることを好むが，そんな彼が心から愛する唯一の女性が Paula だ。Paula と Anson は相思相愛の間柄となり共に結婚を約束するが，しかしながら，二人の間には何の障害もないのに，Anson は実際には結婚へ向けての行動を取ることがない。二人が結婚に至らないのは，外的な要因があるのではなく，ただ Anson が結婚に乗り出そうとしないという，Anson 自身の問題に原因が求められるのである。

Paula にこれが最後とばかりに，結婚を申し込んでくれるよう泣きながら懇願された時，Anson は，“Anson, feeling her tremble, knew that emotion was enough. He need say no more, commit their destinies to no practical enigma. Why should he, when he might hold her so, biding his own time, for another year—forever? [...] he hesitated, thinking, first, ‘This is the moment, after all,’ and then: ‘No, let it wait—she is mine....’” (327. 筆者強調）と考えて，結局彼女へ結婚を申し込まない。ここで使われている “his own time” そして “the moment” とは Anson が結婚する時，すなわち Anson が大人になる時を表しており，このセリフからはその時を決定するのは自分自身である，という Anson の時間認識がうかがえる。時が Anson を決定するのではなく，Anson の方がどれだけ “his own time” を待つか決めることができ，“the moment” を待たせたることができるのだ。Anson にとって時間とは自分の意のままにできるものであり，大人になる時も自分で決めることができ，それまでは留めることができると考えている。

このように，Anson の Paula への態度は，彼女との恋愛関係には喜んで身を捧げるが，結婚することには躊躇している。Anson にとっては愛する女性を失ってもかまわない程に，結婚することを避けようとする。結婚という大人への通過

儀礼を通ることを避け，子どものままでいることを望んでおり，大人になることを先延ばしにする。このことが，心から愛する人との結婚に踏み切れない理由である。

Anson にとって，時間は自分に対して従属的なものであり，時間は留めることができると考え，その留めた時間の中で Anson は子どものままでいようとする。それは Dolly との恋愛においても同じで，Dolly とは初めから遊びの恋として付き合い，Dolly や彼女の家族が結婚を持ちかけてこようとすると，Anson は Dolly と別れることを決める。結局 Anson は Dolly を深く傷つけることになるが，それでも Anson は結婚することなく子どものままでいようとする。

Anson は自分が結婚することは拒んでいるが，しかし結婚そのものの価値を否定しているわけではない。叔母 Edna が若い男性 Cary Sloane と不倫し結婚を汚したことを，Anson が決して許さないという態度には，Anson の結婚への信頼が表れている。Anson は世間一般の結婚の価値は多いに認めているのに，自分自身は結婚に踏み出そうとしない。それは，世界とは別に，Anson には自分だけは子どものままでいられるし，時間を留められるという自分だけの時間のあり方があるということだ。

このように，3つの結婚に関わる Anson の態度は，世界の時間のあり方とは別に，Anson には自分の時間のあり方があり，自分でその時間を操ることができ，Anson は自分の時間を留めることができるという Anson 独自の時間認識が見えてくる。そしてこの時間認識故に，彼は〈boy〉のままでいようとするのだ。

2．時間と富の関係：「金は時なり」

それでは Anson はなぜ，時間は操ることができ，留めることができるという時間認識を持ったのだろうか。例えば，この時間を操るというテーマに対して，SF 作家達はタイムマシーンという形で科学の力に頼ったが，Fitzgerald 文学においては，富の力によって時間は操ることができる，という考え方がある。時間は操ることができると考えるのは，Anson を含めて富を所有する人物たちに限られている。1922年の短編"The Diamond as Big as the Ritz"においては，巨大なダイヤモンド鉱山を所有する Braddock Washington は，富を差し出すことで神を買収し，時間を昨日に戻しそのまま時間を止めてもらおうとする。また *The Great Gatsby* では，富を獲得した Gatsby は"'Can't repeat the past?' he cried incredulously. 'Why of course you can!'"(86) と過去をくり返すことができると考えている。これらの試みは結局失敗に終わるけれども，重要なことは，Fitzgerald の作品のこれらの人物たちは，富によって時間がコントロールできるということについて，何の疑いもなく当たり前のように思っているということ

だ。彼らは富の中に，金で買えない時間というものまでをも手に入れることを可能にするという力を見出しているのである。つまり，富を単に形而下的なものとしてだけではなく，そこに形而上的な価値を見出しているのだ。

これと同じに，富に形而上的なものを結びつけた人物に Max Weber がいる。彼はその著書『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において，タイトルが示すように，資本主義という俗なるものの成り立ちについて，プロテスタンティズムという聖なるものを関係づけることによって説明しようとした。その著書の中で，Weber は資本主義の精神を表す例示として，Benjamin Franklin に言及し，彼の“Advice to a Young Tradesman”から「時間は貨幣だということを忘れてはいけない。」という一節から始まる文章を引用している（40）。現在でも「時は金なり」ということわざとして残っているこの Franklin の非常に有名な言葉は，時間を無駄にすれば，その分得られただろう貨幣を失ってしまうという，道徳的行いと蓄財をイコールで結びつけた Franklin の思想をよく表した言葉である。

この Franklin の有名な言葉からも分かるように，Franklin にとってとりわけ重要だったのが〈時間〉である。Franklin にとって時間が重要だった理由について，巽孝之は「彼の徹底した「時間」へのこだわりが，人生の初期における過ちは，あたかも誤植のように以後の人生においていくらでも修正可能という，考えようによっては驚くほど反動的な修正主義転じて歴史改変の姿勢を形成した[...] 彼にとって時間が貴重なのは，功成り名を遂げさえすれば，若き日の恥辱など晩年になっていくらでも改竄し美化することさえできるから」（73-74）と説明する。この指摘において重要なのは，時間を大切に使えば貨幣は貯まっていくと当初は説いていたのが，貨幣を貯めれば時間はやり直せる，という逆転が起きていることだ。つまり「時は金なり」だったのが，金を得た者には「金は時なり」になるのだ。

働かなくとも十分に生活していけるだけの財産を所有する Anson だが，それにも関らず彼は証券会社に就職し，そこで着実に働いていき共同経営者になるまでの姿がエピソード的に描かれている。このように，Anson は確かに貧しさから金持ちへという訳ではないが，Franklin 的なセルフメイド・マンの思想が貫くアメリカ社会を生きているとは言えるだろう。そして，Franklin 的な思想を生き，実際に富を所有する Anson には「金は時なり」と思えたに違いない。このように時間と富は結びつき，「金は時なり」という形となって，Anson に時間は操ることができるという認識を持つに至らせたのだ。

Ⅱ．Anson の〈私的時間〉に反する〈公的時間〉

時間は留めることができると考え，その停止した時間の中〈boy〉のままでいようとする Anson だが，この Anson の時間認識は全ての人が共有する普遍的なものではなく，あくまで Anson という一人の人間にとってだけの時間のあり方だ。時間のあり方について Hans Meyerhoff は，二つに分けて説明している。一つは「人間経験の漠然とした背景の一部となっている時間意識，いい換えれば，人間生活の営みが織りなされる素地に含まれている時間意識である。」（8）と定義し，つまりは「私的な，個人的な，主観的な」（8）時間であると説明している。もう一方については，「われわれの個人的時間経験とはまったく無縁なものであり，人間相互の間にあってはじめて有効性をもつものであること，特に重要なことは，それは人間経験の主観的な背景を指すのではなくて，自然界の客観的構造を指す」（8）とその特徴を述べ，「公的で客観的な」（8）時間だと説明する。このように，時間には〈私的時間〉と〈公的時間〉という対立しあう二つのあり方がある。そして，この時間の二つのあり方という観点から Anson の時間認識を捉えると，時間は留めることができるという彼の認識は〈私的時間〉に当てはまる。このように，この物語には Anson の〈私的時間〉が描かれているわけだが，しかし，それとは対立するもう一方の〈公的時間〉もまた Fitzgerald は描き出している。

私たちが一般に捉える〈公的時間〉の性質とは，例えば「歴史の成り立ち，時計の刻一刻進む動き，一日の，季節の，一年の移り変わりをみれば，時間が不可逆であり一定の速さで前進することはごくあたりまえ，常識であろう。」（Kern 40）という説明で異論はないだろう。この不可逆さ，一定の速さでの前進という性質を持つ〈公的時間〉は，Anson にとっての留めることができるという〈私的時間〉とは対立し合うものである。Part VII において，Anson は彼にとって必要不可欠なほどに大切なもの，富と優越感，友人，唯一の愛を失い孤独になる。Anson が孤独になる原因は，例えば Sergio Perosa が "Wealth separates him from happiness"（84）というように富に理由があるのは間違いないが，それはさらに言えば，富がもたらした Anson の時間認識にあるに違いない。Part VII には Anson の姿を通して〈私的時間〉と〈公的時間〉という相容れぬ二つの時間の対立関係という図式が描かれている。

まず初めに，Anson は彼を最も特徴づけていた富と優越感を失う。母親が亡くなったことにより，Hunter 家の財産は Anson を含めた６人の兄弟で分割相続されることになり，それに相続税を支払うと，残った財産はもはや Hunter 家を他と隔てるほどの際立った莫大な資産ではなくなってしまう。このように，Anson が富を失う理由は，散財や放蕩といった何らかの彼個人の責任ではなく，

母親の死そして相続に求められる。死というのは，不可逆に前進する〈公的時間〉の中では等しく全ての人に訪れる必然であり，また相続という何かを受け継いでいく行為は，過去から未来へと前進する〈公的時間〉の中でこそ可能な行為だ。つまり，母親の死そして相続というのは，〈公的時間〉を表したものであり，その〈公的時間〉こそが Anson から富を奪った原因であると言える。さらに母親の死によって，Anson が初めて優越感を覚えたコネティカットの村の別荘を売るということからも，〈公的時間〉によって Anson の優越感が失われたことがわかる。

次に，Anson は友人，特に大学時代の友人を失う。Anson にとって大学時代の友人は特別な存在で，"it was upon them [the men from his own college] he had expended the most time and affection"（341）と言われるほどに大切な人々だ。お酒を飲んだり，女の子たちを誘ったりといった浮かれ騒いだ時間を共に過ごした友人たちと Anson が疎遠になってしまうのは，"he [Anson] became not a little depressed at the inroads that marriage, especially lately, had made upon his friendships."（341）というように，友人たちの結婚が原因となる。前章で述べたように，この作品では結婚は大人になることを意味する。結婚し大人へと変化していった友人たちと，結婚せず少年のままでいる Anson の間の大人と子どもという差が，友人たちと Anson を隔てたのだ。つまり，結婚した友人たちは前進する〈公的時間〉の中を生きており，一方，結婚しなかった Anson は留まったままの〈私的時間〉の中を生きるというように，友人たちと Anson は生きる時間が異なっているのだ。この違いは友人たちにとっても，"They were always glad to see old Anson, but they dressed up for him and tried to impress him with their present importance"（341-2. 筆者強調）と認識されており，"present" な時間を生きる彼らにとっては，Anson は "old" な時間に生きる人物になってしまったのだ。このように〈公的時間〉は結婚という形を通して，Anson から友人たちを奪い去る。

さらに，三つ目に Anson は愛を失う。Anson は偶然，心から愛したかつての恋人 Paula と再会するがこの時の二人は，行く場所もなく孤独に打ちのめされている Anson と，一方再婚し新しい夫との子どもを妊娠し幸せいっぱいの Paula というように対照的に描かれる。この二人の対照は，Anson が選んだ結婚をせず少年のままでいるという〈私的時間〉と，Paula が選んだ結婚し大人になるという〈公的時間〉という対照でもある。つまり Paula は〈公的時間〉を表す存在であり，その Paula によって Anson の愛は奪われることになる。Paula は現在の幸福感を，"You see, I'm in love now－at last."（346）と Anson に告げるが，この言葉は裏を返すと，かつての Anson との愛は真実の愛ではなかったことを

意味し，Anson にとっては唯一の愛が否定されてしまう。

さらに，Paula は Anson に，"You'll never settle down," (346) と告げ，Anson に激しい衝撃を与える。それは Paula からの，Anson が大人になることを否定する宣告だからだ。かつて二人が付き合っていた時には，二人の関係は Anson が主導的であり，彼が Paula をはねつけるという形で恋愛は終わったが，今は Paula が優位に立ち，Paula が Anson を否定するというように二人の関係は逆転しているのだ。以前彼女と別れた時は Anson にとっては，ただ Paula を失ったというだけだったが，優越感を持って生きてきた Anson にとってはこの時こそ，真に愛を失ったということなのだ。二人の愛が完全に終わっていることは，Paula と Anson の次のやりとりに集約されている。

> She raised her face to her husband.
>
> "Well, I'm ready," she said. She turned to Anson: "Do you want to see our family gymnastic stunt?"
>
> "Yes," he said in an interested voice.
>
> "All right. Here we go!"
>
> Hagerty picked her up easily in his arms.
>
> "This is called the family acrobatic stunt," said Paula. "He carries me up-stairs. Isn't it sweet of him?"
>
> "Yes," said Anson.
>
> Hagerty bent his head slightly until his face touched Paula's.
>
> "And I love him," she said. "I've just been telling you, haven't I, Anson?"
>
> "Yes," he said.
>
> "He's the dearest thing that ever lived in this world; aren't you, daring? ... Well good night. Here we go. Isn't he strong?"
>
> "Yes," Anson said.
>
> "You'll find a pair of Pete's pajamas laid out for you. Sweet dreams — see you at breakfast."
>
> "Yes," Anson said. (347)

この二人の会話の場面は，Arthur Mizener が "the understated climactic scene" (194) というように，控えめな調子ではあるがこの作品にとって重要な場面である。楽しげに夫のことを喋る多弁な Paula と，それに対しただ "Yes" とだけ答える寡黙な Anson というように対照的に描くことで，両者の間にある隔たりを

巧みに表現している。Paula は結婚し大人として〈公的時間〉を生きており，一方 Anson は結婚せず少年のまま時間は留められるという〈私的時間〉を生きており，二人が愛という同じ時間を共に生きることはあり得ないことが，はっきりと示されている。二人は決定的に隔たっており，Anson にとっての唯一の愛が完全に失われてしまったことを二人の会話は明らかにしている。

Anson が大切なものを失う過程とは，〈私的時間〉と〈公的時間〉との対立関係であり，最終的には〈私的時間〉は〈公的時間〉には抗えないことが描かれている。しかし，人がどんなに〈私的時間〉を求めようとも，現実世界で生きる限り〈公的時間〉から抗うことはできないのは自明のことだ。Fitzgerald があえてそのような明白なことを書いたのは，人が抗えないことが決定づけられている〈公的時間〉を用いることによって，Anson に喪失の経験を経させるためだったと言える。では，どうして Fitzgerald は Anson に喪失を経験させたのかを次章で検討していく。

Ⅲ．成長から反・成長する Anson

Anson はこれまで優越感を保ち大切なものを喪失することなく生きてきた。例えば大学に入った時も，自分が人気者になれないと悟ると，すぐに生活の中心の場を大学からニューヨークに移すことで自分が中心にいることができるようにしてきた。Anson は，“they [Anson's aspirations] differed from the aspirations of the majority of young men in that there was mist over them, none of that quality which is variously known as “idealism” or “illusion.” [...] Most of our lives end as a compromise－it was as a compromise that his life began.”（319-20）というように，初めから不可能なものや得られないものに対して夢も希望も抱くことをせず，だからこそそれらに裏切られ大切なもの喪失することもないという生き方をしてきたのだ。

このように喪失を知らなかった Anson が〈公的時間〉により大切なものを奪われることによって，初めて喪失を経験する。この喪失とは「子どもは，成長とともにさまざまな他人との関わりを通じて，『自分が万能ではないこと』を受け入れなければなりません。」（斎藤，206）というように，自己の無限性から有限性を知ることによって成長するという人間の成長の一つの過程と言える。優越感を伴って生きてきた Anson が〈公的時間〉によって初めて自分の孤独や無力さに直面することで，Anson は成長の過程に踏み込んだのだ。

このように物語内容からも Anson の成長を読み取ることができるが，この Anson の成長を読者に意識させるのには，物語内容だけではなく，いかに語られるかという物語言説も関わっている。John Kuehl が，“The story is a chronicle

rather than a drama, however, and thus lacks the plot elements – conflict, crisis, climax – necessary to the theatrical novel preceding it." (72) と述べているように，この作品は「1917年」，「1920年」，「1922年」という様な具体的な年数，そして「18歳」，「28歳」といった明確な年齢を示し年代順に語られて行くという，不可逆に前進する〈公的時間〉に従って語られている。このように，〈公的時間〉であるクロニクルという物語言説を使って Anson について語られていることによって，この作品における〈公的時間〉の重要性が意識され，〈公的時間〉の前で敗れる Anson の姿は不可能を知るという形での成長として受け止められる。

しかし，この Anson の成長という姿はエピローグによって否定される。エピローグはそれまで築き上げた Anson の成長という物語を否定するためにあるとさえ言える。エピローグではまず Anson の成長が確認される。会社の同僚たちに "the change that had been coming over him" (348) というように，また語り手に "I was amazed at the change in him" (348) というように認知される Anson の変化とは，彼の成長のことを表している。さらに Anson が大人へと成長したことの証となっているのが，"His chief preoccupation was with the fact that he was thirty years old" (348) という30歳になったことへの関心である。30歳は，*The Great Gatsby* において Nick が "'I'm thirty,' I said. 'I'm five years too old to lie to myself and call it honor.'" (138) と言っているように，Fitzgerald にとって若さが終わり，大人になったことを示す特別な年齢なのだ。

しかし，大人へと成長した Anson は再び以前の状態に戻ってしまう。休暇を取るよう勧められヨーロッパへ向かう船上で，以前のように若い女の子と恋の遊びを始める。この再びの変化において重要なのは，Anson の変化のきっかけだ。"After one cocktail a change came over him" (348) というように，Anson の新たな変化を促したのはたった一杯のカクテルという，理由としてははなはだしく空虚なものである。けれども逆に，その理由がより空虚であるほど，Anson の成長を無化する効果も大きくなる。一杯のカクテルという軽い理由で戻ってしまうのなら，Anson の成長もそれと同じく軽いものだったということになるからだ。富と優越感，友人たち，唯一の愛という大切なものたちを失うことによって獲た成長という "the change" は，一杯のお酒によって "a change" へといとも容易く戻ってしまうのだ。このように，大人へと成長した Anson は再び子どもへと反・成長したのだ。エピローグによって，それまで築いてきた Anson の成長という物語は，Anson の反・成長物語へとなるのである。

それでは，これまでの Anson の成長物語が無意味になってしまうかというと，そうではない。Anson が大人になることを拒むという反・成長が，ピーターパンのように子どもが子どものままでいようとする形で成されているのではなく，

子どもから大人へ，そしてその大人から再び子どもへと戻るという形で成されていることに重要さがある。Anson は子どものままでいようとした〈公的時間〉との抗いによって，それがいかに大切なものを失うかを認識している。故に，大人から子どもへ戻ろうとすることは，かつて経験した痛みを再び引き受けることになり，それでもなお不可能に挑戦しようとするということだからである。痛みや不可能さを認識していてもなお，その不可能に立ち向かおうとする Anson の姿は，彼は〈boy〉に戻っても，それはかつての未熟さではなく，イノセンスと呼ばれ得るものに昇華されていると言える。大人へと成長するという過程があったからこそ，Anson はそこから反・成長によって真にイノセンスを獲ることができた。そして Fitzgerald にとって真のイノセンスとは，単なる不可能を不可能だと知らないまま何も失うことなく夢見るというものではなく，喪失という痛みを経た上で，それでもさらに不可能なことを夢見ることである。そしてその点に，甘いだけのロマンティシズムではない，現実的厳しさを併せ持った Fitzgerald ならではのロマンティシズムが表現されていると言えるだろう。Fitzgerald のロマンティシズムは，夢と現実が反発し相克する様に対して，現実から目を背け直視することなく夢の世界に逃げ込むのでもなく，夢を完全に否定し現実だけを選び取りペシミスティックに陥るのでもない。それは，現実の世界の中で夢を見続けていこうとする，しなやかな強さを持ったものなのだ。

また，Anson が経験を通して辿り着く先が，子どもから大人へという直線的な発展ではなく，未熟な子どもから大人へそしてイノセントな子どもへという〈戻る〉という形でなされていることも Fitzgerald ならではの描き方だと言える。著しい経済的発展や科学技術の進展が行われていた1920年代という，明日，明後日という直線的未来に進歩を重ねていた時代において，Fitzgerald は直線的進行の先にではなく，〈戻る〉という流れの先に Anson の辿り着く先を設定した。ここにも彼の時間への強いこだわりがうかがえると言える。

結

冒頭で述べたように，これまで“The Rich Boy”は *The Great Gatsby* の続編的な作品と見なされてきており，Robert Sklar が“Anson Hunter grows out of Tom Buchanan”(211) と述べるように，Anson は Buchanan を引き継いだ人物だとされてきた。確かに，富というテーマで両作品を結びつけた場合，Anson も Buchanan も生まれながらの金持ちという共通点をもっている。

しかし，イノセンスを獲得した Anson という観点から考えると，Anson が引き継いだ人物は Buchanan ではなく Gatsby だと言えるのではないだろうか。それも Gatsby を反転させる形で Anson に引き継がれているように見える。

Gatsby は富を持たず生まれたことで，富を獲得することによって失ったものを取り戻せるという夢を見たイノセントな人物である。一方 Anson は富を持って生まれたことで夢や理想を持てず，富を失うことによって不可能なものを夢見るイノセンスを得た人物である。このように富の面で Gatsby を裏返した人物である Anson に，喪失とイノセンスという Gatsby 的資質は引き継がれている。

では本短編において，Fitzgerald はどうして Gatsby の資質を富の面では正反対と言える Anson に受け継がせたのだろうか。Fitzgerald の金持ちに対する思いは，Sklar が "despite his lifelong association with the rich, Fitzgerald never succeeded in portraying them sympathetically." (158) と指摘するように金持ちには共感できず，心から肩入れすることができなかったというのが一般的な見解である。しかし "The Rich Boy" において，Fitzgerald が真に批判しようとしたのは金持ちである Anson ではない。Anson が初めて優越感を覚えたのは，自分の富に対して "half-grudging American deference" (319) が払われていることに気づいたからだと Fitzgerald は描き，Anson の優越感を彼個人の性格に起因するものとしてではなく，そのような富を崇める拝金主義的なアメリカに原因を求めている。つまり，Fitzgerald が真に批判したのは，富を崇拝するアメリカという国に対してだったのではないだろうか。そういう見方をするなら，Gatsby も Anson も共に富を崇拝するアメリカ社会によって生き方を翻弄された，アメリカ社会の失敗者と言える。Fitzgerald は富を持たざるものはアメリカ社会の犠牲者となり，富を持つものは恩恵を受けるというような単純な二分法では捉えてはいない。持つ者である Anson も持たざる者である Gatsby も富に対して，富の所有自体を目的としているのではなく，それを手段として捉えている。さらに彼らは富を獲得した先に，富では叶えられないものまでをも可能にする夢を見出している。Fitzgerald はそうしたアメリカ的な独立独歩の姿勢や夢を抱き続けるロマンティックな姿勢に深い共感を込めて二人を魅力的な主人公にした上で，その二人が結局は失敗者になってしまうという姿を描くことによって，二人を失敗者に追い込んだ，富の所有自体を目的とするアメリカの表層的で安易な拝金主義を批判しようとしたのではないだろうか。

Fitzgerald は1925年 3 月に，Anson のモデルとなったプリンストン大学時代の同級生 Ludlow Fowler に対して，"I have written a fifteen thousand-word story about you called *The Rich Boy* — [...] It is frank, unsparing but <u>sympathetic</u> and I think you will like it — it is one of the best things I have ever done." (*Correspondence* 152. 筆者強調) という手紙を出している。これまで，Fitzgerald のこのコメントに対しては，彼はそうは言いつつも結局は共感をもって Anson を描くことはできなかったと思われてきた。しかしこの手紙で述

べているように，Fitzgerald は確かに Anson に対し，アメリカ社会が生んだ失敗者として共感を込めて“The Rich Boy”を書いたのだ。

広島大学大学院

引用文献

“boy.” Def. 1. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. CD-ROM. Oxford: Oxford UP, 2002.

Bruccoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. Rev. ed. Columbia: U of South Carolina P, 2002.

Bruccoli, Matthew J. and Margaret M. Duggan, eds. *Correspondence of F. Scott Fitzgerald*. New York: Random House, 1980.

Curnutt, Kirk. *The Cambridge Introduction to F. Scott Fitzgerald*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.

Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. 1925. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Cambridge UP, 1991.

_____. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: A New Collection*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Scribner's, 1989.

Hemingway, Ernest. *The Snows of Kilimanjaro and Other Stories*. New York: Simon, 1995.

Kuehl, John. *F. Scott Fitzgerald: A Study of the Short Fiction*. Boston: Twayne, 1991.

Mizener, Arthur. *The Far Side of Paradise: A Biography of F. Scott Fitzgerald*. Boston: Houghton Mifflin, 1951.

Perosa, Sergio. *The Art of F. Scott Fitzgerald*. Trans. Charles Matz and Sergio Perosa. 1965. Ann Arbor: U of Michigan P, 1968.

Piper, Henry Dan. *F. Scott Fitzgerald: A Critical Portrait*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1965.

Sklar, Robert. *F. Scott Fitzgerald: The Last Laocoön*. New York: Oxford UP, 1967.

Way, Brian. *F. Scott Fitzgerald and the Art of Social Fiction*. New York: St. Martin's, 1980.

ヴェーバー，マックス．『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』．大塚久雄訳．東京：岩波書店，1989.

カーン，スティーヴン．『時間の文化史：時間と空間の文化：1880-1918年』．上巻　浅野敏夫訳．東京：法政大学出版局，1993.

斎藤環. 『社会的ひきこもり－終わらない思春期』. 東京：PHP 研究所, 1998.
巽孝之. 『アメリカ文学史のキーワード』. 東京：講談社, 2000.
マイヤーホフ, ハンス. 『現代文学と時間』. 志賀謙, 行吉邦輔訳. 東京：研究社, 1974.

Money and Time in "The Rich Boy": Fitzgerald's sympathy toward Anson

Sachie Ikeda

In their discussions on F. Scott Fitzgerald's "The Rich Boy" (1926), critics have almost unanimously focused on and quoted the following famous sentences: "Let me tell you about the very rich. They are different from you and me." They have widely surmised that "the rich" is the theme of this particular short story. While I accept this to be true, I nevertheless assert that if we restrict the meaning of the story to just the problems of "the rich," we shall be losing out on Fitzgerald's real intention.

"The Rich Boy" has an additional theme: the problem of the passage of time. The title of the short story undoubtedly refers to Anson Hunter, the protagonist. However, there is a confusing aspect to this title. Anson is not a boy but a young man, for the story chronologically traces his journey from the age of twenty-one to thirty. Fitzgerald himself regarded Anson a young man—and not a boy since he titled his collection of stories of which "The Rich Boy" is a part *All the Sad Young Man.* It would be thought that there was a profound significance to Fitzgerald's choosing the word "boy." He had made an attempt in his story to depict Anson struggling with the passage of time, so his choice of words seems to point to this factor. In this essay, I intend to include "the passage of time" within the ambit of my investigation of "The Rich Boy"—as indeed Fitzgerald, in my opinion, intended—and not focus on just "the rich."

Although Anson falls in love with Paula Legendre, the first woman he loves with all his heart, he is reluctant to marry her. The reason behind his disinclination is his desire to remain boy. Marriage would mean his becoming a husband and subsequently a father, a fact that he shrinks from. His attitude toward marriage signifies his unwillingness to accept a shift in his life. In other words, Anson rejects the passage of time.

Anson believes that with the aid of his immense wealth, he can stay the passage of time. In "Advice to a Young Tradesman," Benjamin Franklin mentions that time is money, which in other words means that wasting one's time is equal to losing money. Anson converts Franklin's concept of "time is money" into "money is time." In his opinion, if he has wealth, he can control

the passage of time.

However, no matter how fervently he may have resisted the passage of time in his dreams, in reality, he cannot stop time's passing by. As time rolls on, Anson loses the things most important to him: his feeling of superiority, his friends, and love. His struggle with the passage of time leaves him completely defeated and solitary. In this manner, Fitzgerald does not allow his protagonist to remain a boy. However, it is worth mentioning that Fitzgerald's Anson does not make the transition from boy to man in spite of having gone through sadness, solitude, and the loss of his dream. Neither the innocence of a boy nor the sadness and pessimism of a man who has lost everything is important for Fitzgerald; what interests him is the romanticism of the conflict between reality and dream.

Generally speaking, it has been presumed that Anson inherits the character of Tom Buchanan from *The Great Gatsby* (1925). However, when we take the romantic aspect of Anson into consideration, it is apparent that he does indeed have some features in common with Gatsby. Fitzgerald's story clearly reflects his sympathy toward Anson.

Graduate School of Letters, Hiroshima University